



Member's Open Space



浅草六区で最も浅草的^{いっかく}な一廓と世相(1)

●美唄歯科医師会会員

雨田 実

浅草は万民が共に楽しむ、日本一の盛り場である。それ故にまた、歓楽の花の蔭に罪悪の匂いが漂う暗黒の街でもある。浅草ほど、時代を敏感に、大胆に反映している土地は二つとない。興業物はいうまでもない。露店商の口上からも、艶歌師の歌からも、飲食店の中からも、吾々は時事漫画を見せられている思いがする。ただ浅草は、どんな新しいものを受け入れる場合でも浅草風に、つまり浅草型に変形してしまう。六区33館は映画業者、興業師、俳優、芸人などの間に、絶えず激しい争奪戦が行われていて、昨日の喜劇小屋が今日は安来節となり、明日は映画館となるといったふうに、目まぐるしい流転^{りゅうてん}を続けている。それは義理も人情もない資本の戦いであり、民衆娯楽の方向の鋭敏な現れ以外の何物でもない。レヴィウーとジャズと、この言葉ほど昭和初め(4年~6年頃)の浅草で、興業物の看板に乱用されたものはない。とりわけ、変型寄席とも呼ぶべき江川大盛館^{えがわたいせいかん}や、遊楽館^{ゆうらくかん}や、帝京座^{ていきやうざ}や、玉木座^{たまきざ}や、江戸館^{えどかん}などの演芸館には、奇怪な和製レヴィウーが競争的に続出した。安来節の歌い手が、声楽家風の裾模様にフェルト草履、ピアノ伴奏、しかも安来節の間に藤原義江流の歌いかたで出船の港をはさみ安来節を独唱する。また、安来節の踊り子が振袖で、いや時には日本髪にワンピースの洋装で、三味線や太鼓および洋楽、和洋ジャズ合奏の東京行進曲に合わせて、ジャズ、ダンスを踊る。いわば、流行ジャズ小唄的な騒ぎが何よりも、その頃の浅草である。2流以下3流4流所の寄席芸人達は、その空気を追っかけるためにそれぞれの智慧を絞って奇をてらい、イカモノとなり、インチキとなり、見るも痛ましいばかりである。安来節、小原節、万才、

手品、曲芸、笛、都々逸^{とどいつ}、物真似、ダンス、その他なんでもの百芸大会さながらの演芸館で、土方や職人や立ちん坊や浅草的な人々が、まるで自分達の宴会に芸者を招いたようなつもりで、野次ったり、歓呼したり、最も浅草らしい空気を醸しているのである。

目まぐるしい都会の東京でも、特別の流転の激しい一廓であった。人々が階級を忘れ、はらわたをさらけ出すほどに、人間の渦巻きである浅草には論理がなく、実行があった。分析なぞおおよびもつかない。銀座のようにアメリカ直訳風でない浅草は、東京の心臓であり、また人間の市場であった。人間のはらわたをさらけ出す街であった。大百貨店とダンスホールと、この2つを除けば浅草には何でもあるだろうと、浅草の魅力にとりつかれた30歳の川端康成は小説「浅草紅団^{くれないだん}」に書いている。「土方や職人や立ちん坊や、浅草的な人々が」の立ちん坊とは、明治・大正・昭和初期頃の自由労働者の一種で、坂の下などに立っていて、荷車を待ちうけ、車のあと押しなどをして、金をもらった人々のこと。その当時の不景気は歴史的といえる勢いで世界中を襲い、日本も当然その例外ではなく失業者は街にあふれ、大学は出たけれど、封切(映画)の題名の如く大変な就職難で、ドイツ語のボロの意のルンペンという、日本語?が流行した。本道にもルンペンと呼ばれるストープがある。いつまで出口の見えないトンネルの中で人々は、希望を失いながらも、ささやかな娯楽を求めて、つかの間の楽しみを浅草六区に求めたものが、六区の熱狂ぶりであったといえる。

(次号へつづく)